



わたしの聖戦

女性が働くことについて

139

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

縮みゆくニッポン

私に天下国家を語る度量などさらさらない。ということを承知の上で、日本の将来について、最近日常の中で思ったことを徒然なるままに書いてみたい。

学生対象に人口学を教えている。数字やグラフばかりが並ぶ味気ない領域だと思ったら、これがなかなか面白い。なんといつても少子高齢社会の日本である。人口問題を切り口に、社会保障や認知症のこと、少子化にかち位置や不妊から卵子凍結の是非について……等々限りなく広がりを持った学問で、日本が抱えている課題をしっかりと浮きぼ

りにしてくれる。先日は、グループワークの一環として「移民の可能性について—実際と課題」のテーマで学生に発表させた。各国の移民政策の成功例や失敗例を紹介した上で、日本の労働力不足を補うためには150万人以上存在するニート（引きこもり含む）を活用すべき、と結論づけた内容にまつまっていた。

でも、それは受け入れる側ではなく送り出す側としてのこと。明治時代から1945年の終戦まで、実におびただしい数の日本人が世界へ飛び出していった。それだけ労働力過多であったわけ、今とは真逆な時代だった。近年、さすがに人手不足が懸念される介護や医療の分野では外国人を導入



先日、ロンドンで在英の日本人と話す機会があった。彼らが最近驚いたのは、日本国内で飢餓によつて死亡した人のニュースが流れたときだという。もしイギリスでそんなことがあったら、首相が国民の前で謝罪するレベルの事件であり、先進国でありながら飢えて命が絶える人がいるなど信じられない、というわけだ。ちなみに、イギリスは移民が半分を占めており、役所の文書などには10カ国以上の言語が並ぶという。訛りの強い英語がそこかしこに飛び交い、歴史と底力を感じさせるたくましい国だという印象を得た。時同じく、安倍首相がヨーロッパを訪れていたようだが、ほとんど話題になつていなかった。人口学では、現在高齢者世代を65歳以上と定義づけているのを引き上げようとする意見が大勢を占めている。そうすることによって、高齢者人口

は減り、その分労働者人口は増えるわけだから、見かけ上は高齢社会とはいえなくなる。しかし、あくまでそれは数字の遊びの結果であつて、実態が変わるわけではない。女性の閉経年齢は江戸時代とほとんど変わらないし、70歳になればがんの罹患患者数は格段に増えていく。医療は発展しても人の体の基本的なメカニズムが都合よく変化していくわけではない。今やるべきことは、定義の塗り替えではないはずだ。

これだけはいえる。日本は完全に世界から忘れ去られようとしている。国内で、限られた範囲内で生活してはわからないかもしれないが、うわべの情報だけでなく、真実を見極める視点を持たなければ、本当に「ブラックホール日本」になつてしまいかねない、と強い懸念を抱かざるを得ない。

イラスト・伊藤栄章